

昭和三年九月十二日印刷
昭和三年九月十五日發行
（每月一回一日發行）

第三號

太 棹

九月

東京 太 棹 社 發行

配當の非常に多
日華生命

取締役社長	川崎肇
常務取締役	河合良成
取締役	藤山雷太
同	小林作五郎
同	安藤浩
同	茂木啓三郎
同	喜多又藏
取締役支配人	菅田英久
常任監査役	佐久間心一郎
監査役	宇佐美敬三郎
相談役	川崎八右衛門
営業部長	高橋彌太郎

東京丸の内(23)代表番三二一(4)番

日本一安い保料
萬歳生命

社長	川崎肇
専務取締役	河合良成
取締役	中越正彰
取締役男爵	中島久萬吉
取締役	村田省藏
監査役	小林懋
同	窪田四郎
相談役	川崎八右衛門
醫長	郷義男

短期取引員

中澤定治郎商店

營業所 日本橋區坂本町十八番地

電話茅場町(66)三三三〇〇三三三五六番番番

自宅 電話谷區鹽町壹丁目十六番地(35)三三四五番

太棹 第參號 (九月)

□ 口

繪……………岡本癖三醉

□ 寫

眞……………(泉岳寺墓參の文樂一座)

□ 秋

く さ……………小村 孤村(一)

□ 才能者の發見

……………三宅周太郎(二)

□ 義太神樂

……………中野 三允(四)

□ 名士義太夫觀

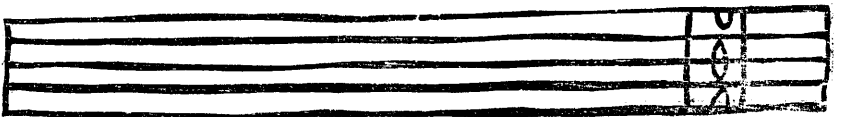
……………
 笹川 臨風
 田中 煙享 (三)

□ 淨曲そぞろ言(3)

……………黒顔 老人(四)

□ 淨瑠璃くちづさみ

……………谷口響阿彌(七)



□ 私の家と義太夫と

……………三浦樂太郎(二)

□ 通話會劇

……………中野 三允(三)

□ 藝界寸話

……………(二六)

□ 太棹俳壇

……………芳河士選(七)

□ 各地會報

……………(二八)

□ 素昇と美朝

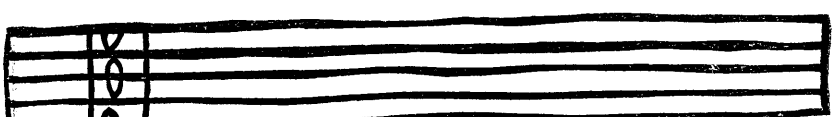
……………巢鴨町人(三)

□ 正音苦聲

……………(三一)

□ 編輯後記

……………芳河士生(三)



公平
穩和
元祖

浪花
名物
淨瑠璃雜誌
每月一回二十日發行
一年前金三圓十二錢

大阪市南區壘屋町四十二番地

發行所
浪花
名物
淨瑠璃雜誌社

振替口座大阪二三九二八番



御 辨 當
幕 の 内
金 ぶ ら
西 洋 料 理

御料理

歌 舞 伎 座
新 橋 演 舞 場
邦 樂 座

三 芳 食 堂

京橋區采女町六番地

仕入部

吉 田 三 芳

電話銀座三五四〇番

御祝ひ、宴會、運動會、おさらひの
御進物用として――まさ物、其他一切御用命に依り御相
談致します。

各宮家御用達



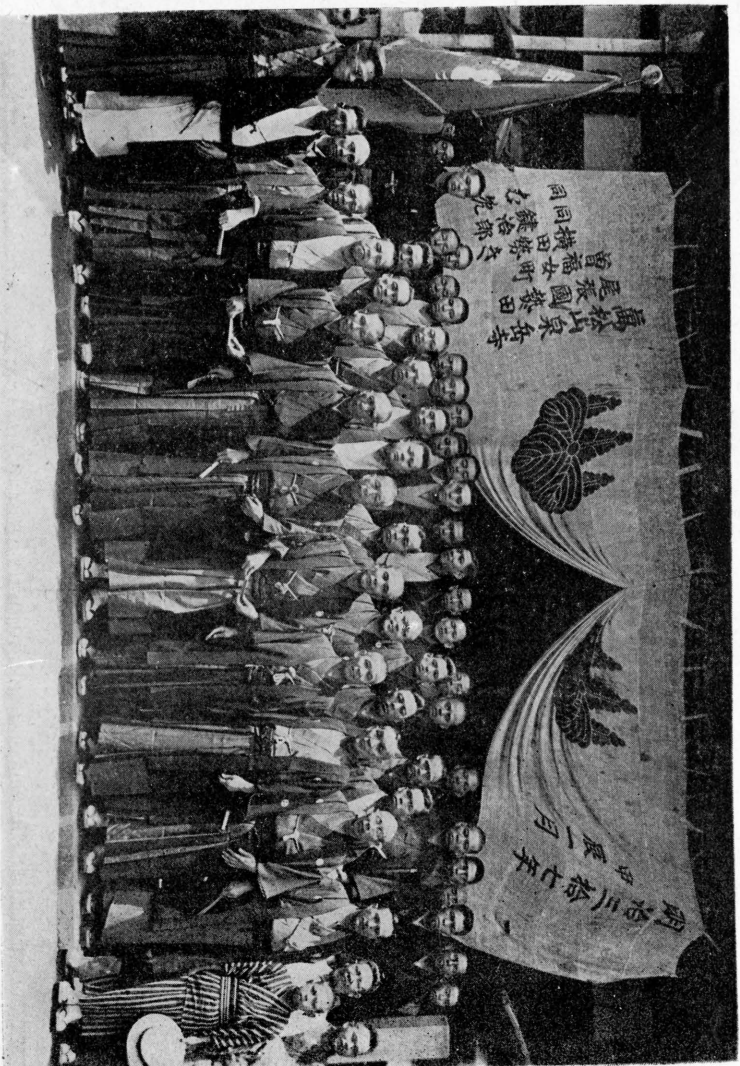
雀壽し本店

小泉嘉六

日本橋區佐内町五番地
電話日本橋(24)一四三八番
一四三九番

大阪壽しは雀壽しへ
御用命願上候

座一樂文の參墓寺岳泉



前列向て右よりニ桐竹紋太郎、吉田文五郎、鶴澤道八、鶴澤友次郎、吉田松太郎、竹本津太夫、竹本朝太夫、竹本相生太夫、吉田玉次郎

中列向て右よりニ竹本大隅太夫、豊竹吉親太夫、竹本掃路太夫、豊竹つばめ太夫、桐竹紋十郎、吉田文之助、竹本越名太夫
後列向て右よりニ野澤勝市、豊竹辰太夫、鶴澤清六、鶴澤友衛門（前列桐竹紋太郎の右隣松竹の井村氏）

三伏の候諸彦益々御清祥の段奉慶賀候降て小生儀在京中は一方ならず御愛顧を蒙り難有御禮申上候就ては此度當地に於て御待合を開業致し候間御上阪の際は何卒御ひろきを賜り度御願申上候

御待合 艷 の家

松村 萬吉
號 松 葉

大阪市住吉區濱口町二七五
電話住吉三〇七五番

九 月 太 倅 第 參 號



秋 く さ

小 村 孤 村

めしひたる老母なくさめむ彌次郎は、思はぬうそもつくべかりけり

鳥部山年は十七はつ花の、お俊に似たる立姿かな

文樂の狐火きゝて歸る夜は、松太郎の絃耳に残りつ

いたつらと言はばいひかしひとすちの、お染の戀のいちらしきかな

黒髪をたちて吾戀すてにけり、何に生くべきお光なるらむ

文樂の人形ぶりもよしされど、津太夫きゝてなかされにけり

いかにせばかくうるはしき藝術を、ふるひおこさん術をしぞ思ふ

琴胡弓三昧の音色のとりくに阿古屋は戀を語るなりけり

八幡の社頭の花の咲き亂れ、亂れてちるやよわき尾上は

秋草の千々に悲しさ忍びつゝ、生きるを悔やむお園なりけり

は 濟 經 の 車 轉 自
り あ に 擇 撰 の 店 賣 販

東撰號 月賦販賣
テース號

乗る身になつて製作し

高野製自轉車

買ふ身になつて勉強す

東京市本所區相生町五ノ二九

高野商會小賣部

電話本所五一七八番
振替東京三五六三六番





才能者の發見

文樂の三頭目に――

三宅周太郎

大阪の文樂は今風前の燈火ともしびの状態にゐる。そのためであらうか、私が自分の「文樂物語」の用で、津太夫土佐太夫古靱太夫などに會ふ時、三人共不思議に同じやうなことを云ふから面白い。即ち、一言にして云ふと何とかして斯道の隆盛、復活を計りたいとの希望なのである。この三頭目のはく言葉は決して口先きばかりでない私は信じてゐる。立派に私はそこに誠意を感じてゐるのは事實である。

で、もしこれが三頭目の誠心誠意であるなら、私はそこに何かの具體的成案を見たいと思ふ。俗に碎いて云ふなら何かの證據を見せてほしいと思ふ。

あの三元老が、唯何とかしたい、何とかして文樂をよくしたい、とかう云つてゐるばかりでは仕方がな

い。さう歎いてゐるばかりでは仕方がない。もしその言葉が、私が信じてゐる様に眞實であるなら餘命幾何もない様な現狀にゐる文樂の爲に、この際せひ事實として救ひの道を講じてほしいと思ふのである。例へば、若い太夫の新たな發見などはどうであらうか。今の文樂の若手と云ふと、全くつばめ太夫一人だ。下つて越名太夫位のものだ。これだけが文樂の「新進」「新時代」の全部であるなど、心ある者はちつと落ついてゐられるわけがないと思ふ。そんな事で文樂の將來を黙して見てゐられるわけがないと思ふ。それはどんな方法でもいい。義太夫の天才などはめつたにあるものでない。そんな天才を捜し出さうなどの大變な理想を考へずに、せめていい素質の人

程度に満足して、新に太夫の發見と養成を心掛けたらどうかと思ふ。勿論犠牲者は出るだらう。が、大事の前のいけにえの小事は仕方ない話である。さう云ふ障害を排して、何とか新たな才能ある人を見出す方法でも講じて、せめて若手から續々と有望な太夫を造つておきたいと思ふ。

所謂素人の中からでもいいだらう。年の若い人で比較的いい素質の人、有望な人、さう云ふ人で特志家を募もつるなどであらうか。三頭目が眞面目にさう云ふ方法をとれば、一人で三人づつ發見しても、三人で九人の新しい人材が出来るわけだ。その中から一人いい人が出て、何もしないで歎いてばかりゐる現狀よりは、まだしも文樂を救ふ道を作ると云ふものである。その素人の才能者の發見は、所謂素人の連中の中から廣く求めるのもいいだらう。又、三頭目が隠れて方々の連中の會位くわいこつそりと聞いて歩いて、これを得る位の手数をかけてもいいだらう。兎に角大きな心で大局に目を注いで、一見愚劣と見える事でもやつて見る事である。その熱心と捧仕との中には、案外な才能者にぶつつかつたりするかも

知れぬからである。これは一例にすぎない。又、人形の方面もこれに似たやり方で、榮三や文五郎玉次郎あたりも後進を求めておくことである。

文樂の三頭目よ。御身達は既に功成り名を遂げた人々である。そして多分後世の淨瑠璃史に残る人々である。さう云ふ結構な身分でないか。外々の藝人と太夫とは根本に於て違ふべきである。その思想は高潔であるべきが本當である。なら此神聖な義太夫道の爲に、せめて清き燈火を點じ給へ。前年古靱太夫が、かうした案を出したと云ふがそれはどうしたかと思ふ。ヒイキやパトロンpatronの御機嫌とりも必要であらうが、かういふ方法も亦必要であらう。そして今の中に何とか人材を全然別途に求める事だと思ふ。今の文樂はその儘として、別に廣い世間に熱愛を以て斯道の爲に呼びかける事である。後年の天才初代竹本義太夫すら、最初は天王寺村の百姓でないか。理屈は大體に變らない。今の世でも、百姓や丁稚や米屋新屋の中に、案外な才分豊かな人が隠れてゐないとは誰が斷言出来るであらう。私はこれを先づ文樂の三頭目の誠意に訴へたいのである。(八月十六日。)



義太神樂

中野三九

播重回顧

「新小説」第五年第十一卷「明治三十三年八月發行に「大阪の千日前」といふ一文がある筆者在兵庫の肩書で「雨之助」とある……中に「女義太夫」の一節

千日前で最も大なる建物の興行席は横井座と云ふ安劇場であるが最も美しい建築物は播重といふ女義太夫席と、呂昌定席と稱ふる同じく女義太夫の席との二所である、何れも構造の美しいのを以て田舎漢を驚かす傍、別に一種の美しいものを蓄へて市内の若年輩の胸を波立たせてゐる、播重席の表看板には「大日本女義太夫修業所」と大業に書立てゝあるが、此席にズラリ名前を並べてゐる連中

は凡そ十四五名もあらう、最も何れも十八九から二十四五歳までの所謂妙齡な婦人でその技藝も満更でないさうだ興行は晝と夜で、晝は正午過からはじめて十一時半頃に終るのだ、晝席の重なる客は軍人である、三々五々寄り集つて來てこの兩席へはいる數は凡そ一席六七十人もあらう、彼の「鎮臺靴」なる一種の扁平靴が五足六足宛繋がれてズット並べてあるところは鳥渡可笑しな感じがするで茲も「京興」の條で言たやうに其趣味はまだ道頓堀的であつて千日前的の越は少い。

右終りの部に「京興」云々とあるに就ては左の項を参照するを要する。

道頓堀川の戒橋を南へ渡つて東すると櫓町、所謂

河竹で五座の劇場が櫓を並べてゐるからこれを櫓町と云ふのである、その南へ折れる西北の角に巍然たる三階建の大建物がある、これが「京興」と云ふ敷焼の料理店である云々。

けれど何方かと云へばこの家の客種は寧ろ宜い方で、中には筒袖の働き人や、草鞋連中がないでもないが、大概是羽織を着てゐる方で、随て所謂千日前的料理店と云ふよりも、寧ろ道頓堀的料理店といふのが適當であると思ふ云々。

以上の事情の下に「播重」が道頓堀的であるといふのだ、余は大正十四年の夏、一夜こゝで落語を眞打とする色物を聴きつゝ、「大日本女義太夫修業所」時代を追想し、感慨に堪えるものがあつたのである。

文樂二の替り

七月九日、文樂の二の替りを朝太夫、松太郎の總見に加はつて出かける、前に遅れたから、今度こそは初めから見やうとしたが、矢張り「一の谷嫩軍記」の「陣門」が初まつてゐた、次が「組打の段」波打際の感じのよいこと、玉織姫の敦盛を慕ふ仕種特に首に

對しての愁嘆に泣かされた自分は、不圖「サロメ」が「ヨカナン」に向ての言動と對照し東西思想の兩極端であることを痛感せずには居られなかつた、而して結局余は「サロメ」なんかより、玉織姫の人形を勝れりとなすに躊躇しなかつた、尤も「サロメ」として余は西洋の名優の演じたものを見たこととはないので、ただ松井須摩子から手品の天勝嬢までのところだが、落付いて味へば味ふ程玉織姫の方がよくなる、そこで余が若し芝居に關係し、活動に關係して居るならば、余は「首」といふ題にして、「サロメ」と玉織姫を見せたいたのだ、特に歐米人が何と云ふか、……余は以上の趣旨を七月の満月會で述べたら酒井勝軍君が歐米には「義理」といふ字がない位だから、とても玉織姫は理解されまいといふた、余は理解されねば、理解されぬなりに、日本にはかう云う思想が傳統してゐるといふ點を示してやればよいと思ふ今左團次が露西亞へ芝居をやりに行つて、「高島屋ア」と露西亞人に熱叫されてゐるさうだが、單に藝術上からのみでなく、左團次が歸つてからも思想的に露西亞人を考へさせる底のものそれが「一の谷嫩軍

葉縣佐貫町へ遷居して居る爲め留守居の身の外出不能であつたのは遺憾至極である。

△△△△△△△△△△△△△△△△ 說教節若松會創立第十三回

△△△△△△△△△△ 記念大演奏會

說教節淨瑠璃の沿革なるものを聞くに、實に今から一千有餘年前桓武天皇の御宇、空海上人が佛法弘通の爲に、聲明律を基礎として作曲せられたるに始まり、後世の一中節、義太夫、長唄、常磐津、清一の如きを始めとしあらゆる日本の聲樂を産み出せる最古の聲樂であつて、始めは主として通俗的の韻文とも云ふべき、何人にも判り易い因果應報の理を、佛事供養などの席に招かれた所の法師等によつて唄はれたものである、……當代家元の五代前に當る若太夫の門人で峰太夫といふ者は、仲間の規約に背いたといふので破門され、名古屋に遁れて岡本美根太夫と稱し、說教節に新内節を加味した「源氏節」なるものを起した、明治六七年頃當代若太夫の師の日暮龍卜の家に寄宿してゐた浮れ節語りの浪花亭駒吉なるものは、長く龍卜方にあつて、カンチガと地節

(附記) 文樂三の替り四の替りは旅行をしたり己むを得ざる會合等があつて行かれなかつた、明治座の「忠臣蔵」も、家族擧つて千

といふ節を加味して「浪花節」を作つた、これが抑も「浪花節の鼻祖」である、……說教節の家元は薩摩淨雲以來代々「薩摩」を名乗つてゐたのだが、八太夫(日暮八太夫)が朝廷の允許を得て、京都四條河原で繰人形芝居を興行することになると、洛中洛外の人々が、その美音と興味とに恍惚として、思はず歸るを忘れて日を暮して終ふと云ふ所から、何時とはなしに、誰云ふとなく日暮八太夫と稱するに至り、その後歴代の家元、薩摩の外に日暮を名乗ることになつたのである、今「若松」を名乗るに至つた由來は、抑も平安朝時代から漸次發達して、徳川時代に入り其の全盛を極むるに至つた說教節も、徳川の中世から、江戸淨瑠璃の勃興に壓倒され、江戸に於て天満八太夫座、天満七太夫座、佃島の結城座等、繁昌を極めたも夢で、年と共に衰頹の悲運に陥り、當代若太夫の師の日暮龍卜の如き、東都家元でありながら江戸に在ては藝を以て衣食することさへ不可能であるまで窮迫し、地方に出て悲しき流轉の旅を續け、生涯不遇の中に辛うじて藝道を固守して逝いたのだが、此龍卜が、薩摩若太夫と名乗つて、流轉の旅の

奥州白河で一夜の興行を催したところ、恰も戊申戰役直後のこととて、會津藩に近きこの地方の人々が薩摩を憎むこと甚だしく、龍卜の掲げた「薩摩若太夫」の行燈は、「薩摩」なる文字のある爲、何人かの爲に斬り破られた、玆に於て餘儀なく傳來の薩摩と云ふを廢して、會津の地方に親しみあり、且つ文字に吉意ある「若松」に改め、又の名を古來よりの日暮を繼いで日暮龍卜と稱したのだ、……當代若松若太夫は明治七年埼玉縣熊谷町松崎清藏の長男として生れ、幼時算術の教師である内田馬次郎……藝名芳太夫……に就て說教節を學び、十四歳で已に芳太夫の藝名を譲られ、家元日暮龍卜の來るに會して之れに入門し、十七歳で峰太夫となり、程なく家元を繼いで若松若太夫となり、明治四十年藝道保存の爲に書を田中正平博士に送て其の知る所となり、呼び出されて東京に出るに至つたのである、……若太夫は聲と節と糸と三拍子揃て、之れと云ふ非の擧げやうもない名人で、實に說教節なるものは若太夫あるが爲の說教節であるとして差支ない、余は十年程前に、余が家に若太夫を聘し、家族や近所の者にそれ

を聴かせたことがある、大正十二年夏帝劇でやつた時は、余が友人武川某の紹介で磯部四郎博士來聴、若太夫は早速に同博士に依頼し若松會を代表しての挨拶を舞臺からして貰つた……が同博士も武川某も其年の震災でやられてしまつた、その後余は勸進帳の文句に氣に入らぬ點があるので書面を以て注意したが、訂正したか何うか、改めて余に對する挨拶がないので知る由もないが、催のある毎に招待狀には接するけれども、先頃市村座でやつた時と、今回(三、七、二)青山の日本青年會館でやつたのとよい外には、聴く氣にもなれなかつた、併し聴けば何時も感服はする、文句の悪いのは校訂者たる故村井絃齋に責任があるのだとすれば、若太夫を責むるは可愛想かも知れない、今回は松林伯知のスケで若太夫は「逆櫓」と「鳴子の唄」を語つた、いつか會つた時、若太夫の後繼者について質したところ「小若太夫」に望を囑してゐるとの答へだつたが、いつも後れて行くので、「小若太夫」を聴いたことがない、扱て當日は「逆櫓」よりも「鳴子の唄」の方に力を入れて聴かれた「岩城判官政氏の遺れ形見の對王丸、廣忠朝臣に拾

はれて先づ御世繼嗣の御祝ひも目出度すんで中將君が佐渡の國へ渡海する、「數多の同勢召し具して」と語本にあるのを召し連れて」といつたり「濱邊の方を御徒步で」とあるを「おひろひで」といつたり、「中將有俊君」を「有俊公」耕作の中にてを「中にて」「兩眼を泣き潰し」を「張らし」「里童」を「村の童」畑中の細道を「畑中」などといつたのは皆本の方がよい、特に「水主」を「すいしゆ」といつたのと「夫は名に負ふ陸奥の五十四郡は手の内に云々」の「夫」を「それ」といつた類である、「ひどい折檻」にあはせてなりとを「ひどい目」としたり、「其やうなこと知らせてなら」を「告げてなら」「憂目を見るは自定なり」を「必定なり」「此島へ買はれて來た身じや」を「買はれた身じや」「見合はす」を「見かはす」の類は可もなく不可もなしとしたところで、何とか一定して置いたらドンナものだらう、これは若太夫に對していふばかりでなく若松會の會員も盲目的に若太夫の妙音妙手に陶醉するを能事とせず、演奏上に若太夫の足らざることを補てやる親切心を起すがよいのだ。

(附記) 余が本誌で説教語を批評するのは「義太夫の將來」を論ずる參考に資したいからである。

綾之助の「高い電車代」

雑誌「ニコニコ」第二六號(大正二年四月發行、因に同誌主宰ニコニコ山人松永敏太郎君は昭和二年六月一日死亡す)に竹本綾之助のことが出て居る。

一昨年四谷傳馬町の寄席「喜よし」へかゝつた時いよく綾之助が切りを語つて、高座から下りると樂屋へ祝儀の紙包みが到來して居る、その包みの上には「電車代」とばかり書いてあつて、呉れた者の名はない、鳥渡指頭で抓んで見ると二十錢銀貨一個だ、綾之助も藝人となつて以來、二十錢の祝儀は嚙矢だから、傍に居る弟子の女の子を顧みて「これはお前に與るよ」と、ほんと紙包みを投り出した、女の子は嬉しがつて、紙包みを開けて見て「あらお師匠さん、この銀貨は黄色いわ」と訝かる綾之助が「どれ」と見ると、これやどうちや、二十錢銀貨と思つたは、山吹色した二十圓金貨なので「まあ」と呆きれ、取戻すも宜くないと、五圓紙幣出して、その金貨と弟子から交換して貰つたこと

がある、しかし呉れた客は未だに分らぬとか

女義として満都の人氣を一身に集めた綾之助は石井某と夫婦になつて高座を退いたが、明治四十一年十月に兩國の立花家から返り咲をしたのであつた、綾之助全盛時代と今日の女義界を比べると世の中は夢の如きものである。

余が綾之助を初めて聴いたは十五才の時で、日本橋は本町三丁目、今でも盛に營業して居る樂種問屋ウロコ事、島原某の奥二階に寄宿し、學校に通つてゐた或る夜、店の者につれられて瀬戸物町の「伊勢本」へ行つた、遅れて行つたのだが殆ど満員の盛況で後ろの方に押詰められた、此方は年少何を語つたのやら記憶はないが、一緒に行つた番頭の作兵衛さん、サワリになると膝で立て小聲に其後をつけてゐるのを奇妙に感じたのであつた、綾之助に關する自分の印象は、「仙台萩」の雀の歌で見台を押へた右の方の手の指で調子を取り乍ら眼を閉ちた時の顔である。

(附記) ニコニコ山人については余等其追悼を昨年六月十五日の満月會で行つたが、山人の傳記の詳細なるものが不明であるのを遺憾として居る、山人について交渉を持て居る篤志家があれば如何なる断片と雖も結構であるから報じて頂きたい。

△△△△△△△△△△△△△△△△
柳原義光伯曰く「義太夫は

決して賤しくない」

「ニコニコ」第二五號から柳原義光伯の談を拔萃する、筆者は同誌記者として松永君を助けた阪井久良岐君である。(大正二年)

或る人から何故に高尚な謡曲を捨て、卑俗な義太夫を好まれるかと云ふ忠告も有つたが、答へて曰く、それは藝術と云ふ立場から見れば謡曲、義太夫皆一特色を有した同等の権利のある者である、丁度君の(久良岐)川柳に於ける如く、俳句、和歌皆同一の権利あり主張あり趣味ある者で、繪畫にしても狩野、四條、土佐何れを主とし、いづれを客とすることは出来ぬ、浮世畫は卑俗なりと云ふも誤なら、川柳には寸鐵殺人の妙味あり、俳句は十七字の外に無限の趣味を云ひ現はし、漢詩和歌それぞれ特長を持て對峙してゐる、故に藝術の立場から見れば、謡曲、義太夫決して甲乙を付すべ

が、此頃政府は大衆的思想善導を云爲し、映畫と優良音樂のレコード吹込とラヂオ利用を以て思ひつきの三案として居る様だが、思想善導を露骨に振廻したやり方は多大なる成功をもたらすものでないといふ點に氣がつかぬのだらうか、極端にいへば胃の藥として苦がい汁粉を與ふる如きものだ、それよりは日本古來の藝術について調査し、それに含まれた傳統的思想を歸納し、之れと近代思想と對照して兩者の美點長所を發揮せしむるがよいのである、而かも汁粉は飽まで甘味のもので差支ないところだが情懷教育の情懷教育たる所以で、こゝから出發したる藝術上の感化こそ、根底ある國民精神の指導となるのである。

△△△△△△△△△△△△△△△△ 佐貫で聞いた素義

八月十七日、妻と交替に千葉縣佐貫の海岸に轉地中の子供の宿へ行く。今夜素人義太夫があるとのことでは丁度よいと聽きに出かける、鍋島といふ九段下今川小路の石屋さんの別荘だ。

沼津の宿平作内之段

力作
富之助

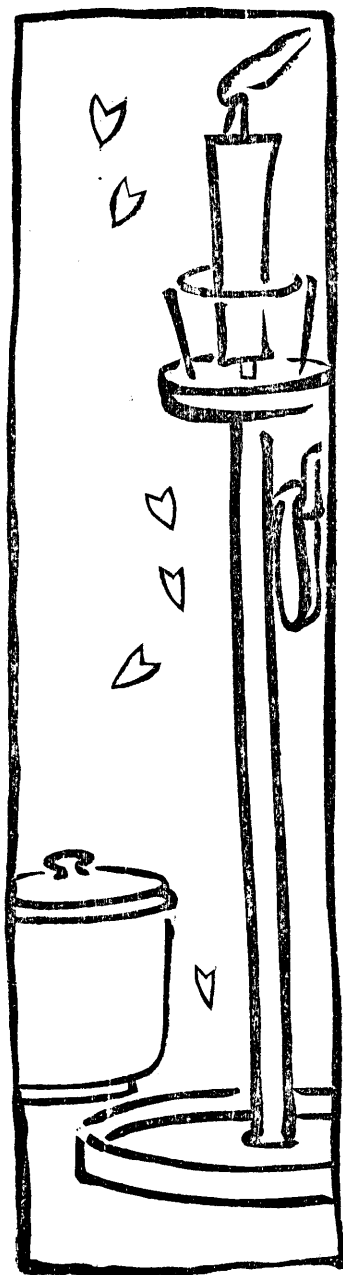
き問題ではない、萬一道徳觀から云つても、謡曲に不倫の材料多く、義太夫に反つて忠孝仁義の分子を多く含まれてゐる、自分は藝術と道徳を爰に同一に見て論ずる程の没分曉漢ではないが、單に通俗教育として義太夫を見たならば、日本人に武士道を普及させたのは義太夫の力與つて大なりと云つても宜しい、日進日露の大戦争に妻子を捨て君國の難に赴く、其悲壯なる精神は義太夫の感化が大半は有らうと思ふ、又三絃に伴ふ故俗だと云ふが、それは三絃の一斑を見て全斑を解せぬ論者である、要するに論破するの値はない(餘談として伯は尙、桂公爵の長唄などを稱揚せられ、義太夫仲間千葉掬香、村松恒一郎代議士、杉山茂丸等の人々を挙げられた、中にも杉山氏は大分の黒人なりとの評を下され、自分のニコニコ的義太夫で發聲運動に目的とするので、他人に聞かせうと云ふ野心のない、ニコニコ的の語口だと一笑せられた)余は柳原伯の言葉の一言を肯定せんとするものではないが、併し義太夫觀として甚だ好ましき理解を有せりと認むるに躊躇はしない、序を以て一言する

大十尼崎之段

菅原傳記寺小屋之段

桃太郎
力太
壽太
富之助

「太十」の「太」が「大」の字になり「菅原傳授」の「授」が「記」の字になつて貼り出してある、最初の沼津は太夫の力作の語り口がサツパリ力が入らず、特に重兵衛など一向になつてなかつたが、二番目の太閤記の三味は別人なるかの如くしつかりして居た、語り手の方の聲が低いのを掛け聲や糸で引立てゝゐる骨折りを十分に認める、語り手は「打死ときくならば」と出る前に「我身」といつて誤まりに氣がつき止めて「打死」とやつたり、「湯の辭儀」を「湯のお辭儀」と「お」の字を餘計に入れたりしてゐたが、若くて別嬪なので濱の漁師共は十分に満足した、「寺小屋」は初めの出はよかつたが、殆ど一段語り盡すので、終りの方はクタビレの形、でも「御台若君諸共に」のところでは疲れた馬に鞭を加へた起きが首肯された、一杯機嫌の漁師と濱の子供達が遠慮なく高い聲で話したり、騒いだりするので、皆語りにくい様子が見え、避暑地と素義についての考を別に書くことゝして鍋島さんに御禮を述べて置く。



名士義太夫観 (順不同)

笹川臨風

一、義太夫も寄席藝となつたり、座敷藝となつては、結局衰微します。やはり操り、歌舞伎に於て用ひられて行かなければなりません。文樂の淨瑠璃を聴いて、朝太夫に就いて殊に此感を深くします。朝太夫の淨瑠璃は要するに寄席藝に過ぎません。松太郎の三味線も達者とは云へ、あの弾きざまは何です、甚だ見つともない下品のものではありませんか。

二、趣味から云ふと纖巧艶冶のものゝ方が好きです。

三、攝津大椽や越路を思ひ出します。近頃名人は無くなりました。上手はありませうが、名人は跡を絶ちました。紋下の津太夫もあの悪い音聲で、あれまでに漕ぎつけたのを殊勝に思ふだけです。若手のしつかりしたものを、うんとみつちり稽古させたいものです。つばめ太夫如きは前途有望と思ひます。東京の寄席藝人は取らず。

田中煙亭

一、近頃とんと聴きませんので、別に感想と申すやうなものを持合せません。先達而の東上文樂は明治座の忠臣藏を大序から九段目まで聴きましたが、遂にじいツと聴き込むといふ境地にはいれませんでした、それは手すりに氣をとられそのか、小屋が大きすぎて、ざはめきが多かつた爲めかも知れませんが、六段目は好きなものですが、當日古靱のそれが、私にはいつものあの人ほどに頂けなかつたのを遺憾に思ひました、寧ろ新大隅の四段目と取り替へたらと思ひました、古靱は七段目の大星が結構だつたと思ひます、津太夫の九段目はまづ期待しただけのことはありました、當代の紋下として充分だと思ひます、友次郎の絃が特に推賞すべきものと聴きました、五段目の二つ玉は人形のお景物として古風なおもしろいものと見物しました、そして、あれを稽古して見たいと思ひました、イヤこれでは御質問の意味と違つた文樂評になつて了つて相済みません、近頃のラヂオの義太夫は、全く愛想の盡きたものです、素人の巧いのをマイクの前へ押し上げた方がよっぽど興味があります。

二、紙治も好きですが太十は更らに好きです、紙治の拙いのは聴かれませんが、太十は素人方の中でも聴いてゐられるのは不思議です、巧ければ纖細、拙くても雄大、といふ事になるのですね。

三、「思ひ出」は澤山ありますが、今度は失禮させて頂きます。



淨曲そゝろ言(3)

黒顔老人

女義太夫(三)

綾之助さんの全盛は永く續いた。素晴らしい人氣はどこまで立つか判らないと思はれた。その綾ちゃん、散(さん)ざりから男鬚にならうと云ふ時分だつたか突如として……と思ふやうに斯界に進出して來た娘——ほんとうに娘といつて好い太夫が現はれましたそれは、大阪から戻つて來た竹本小住の秘藏弟子住の助であります。小住の看板を上げた當時は住八といつて、それでも高座は小住の糸で前を語つてゐたのでしたが、突如！又突如です。小住、住の助の

割看板で眞打に進んだのでした。前にもちよつと書きました鶴蝶と花友がスケ看板で、師匠の小住もスケに彈語りで一段相勤めたものでした。ツマリ切と共に四高座は充分に聽けるものでした。一口に言つて了へば嫵致は綾の助とは比べ物にはなりませんでした。色が小黒くつて、口が大きくつて……ですが、につこり笑ひでもすると大層愛嬌のある可愛らしい娘でした。初めてその高座を觀た時は、小住の癖に中々巧者な語り口だな、位に思つたに過ぎませんでした。つい近所に懸つた爲めに前の鶴蝶が聽きたさに、それから小住の五斗生醉や大

文字屋や油屋やなど、ちよつと女義太夫にはずラに聽かれない出しものだつたので、段々足を繁く——變な言葉に聽えるが——木戸を潜つてゐる中に、この住ちやんの案外の巧さ、意外の確かなのに驚かされるやうになつたのでした。

西郷雲水氏歌

主様そゝろ

ふふふふ

さういふ

いふふふ

おれん

屋」を語りますのでも、宗岸と半兵衛の前半のやりとり「玉三」を聴きましても金藤次の大きな腹から出る笑ひ、十四や十五の女の子の藝では無かつたのです。後には段々お稽古を勵んで、例の大文字や、油屋をだし物にして我黨の喝采を浴びてゐまし

た。

雲水

思へばドウスル黨の元祖でした。一待つてましたの「そこだツ」の「しツかりツ」の、愈よ最後がドウスル——といふ懸聲を見物席から連發した、それが少しも語り手の邪魔になるやうな拙いのでなく實に巧みに、要所々に打込んで行つたものでした。後に厄介視された例のサワリの手べうしなどは譯がちがひます。私等の知つた定連の中にも實に巧妙なドウスルがゐました。實をいふと僕などもその巧い方で、愈よ今度はお目あての住之助なら住之助が上といふ中入の時に、二階の一隅に陣取つてゐる最負の定連が下へ降りて來て「君今度だよ、しつかり頼むせ」「よろしいッ」などと馬鹿々々しい應援團を引受させられたものでした。

實際アノドウスル(所謂)の拙いになるとブチ毀

しで、巧いになると、愉快に語れもするし聴けもするものです。同じ「待つてましたッ」と一つ打込みましても、その太夫が待つた甲斐の無いやうな拙い語りつ振りで、義理にもその急所で手を叩く事の出来ない、などは誠にこまりものです。例へば太十の婆さんの「主を殺した天罰の——」や、先代の「誠に國の——礎ぞや」などで「しつかり」とか「そこだッ」とか、間髪を容れざる注文で、演者も懸命に、聴者も息を呑むといふ微妙な氣分が醸成されるのです、とまア、盛んにドウズツテゐる間は、さう思つてやつたものです。

その時分僕等の同士(もをかしいが)が三四人いつも一緒でしたが、京橋の鶴仙だとか、瀬戸町の伊勢本だとか、兩國の新柳亭だとか、さては芝の琴平や下谷の吹ぬきやまで、遠路も厭はず、それこそ徒歩で追ひ廻したものです。しかも他の人は知らず、僕などは實際色氣ぬきで、唯だくほんとの藝を慕つて出かけたものでした。と、ある日、友達之處へ遊びにゆくと、そこに讀賣新聞があつて、おい、これを見たい、と一人が言ひます、何だい、と手に取

つて見ると「住之助の四天王」といふ標題で、匿名になつてゐましたが、それは僕等四人の事をおもひをかしく、短かい艷種仕立になつて出てゐたのです。この新聞には先達而も寫真入で「住之助の評判記」が出てゐました。それは申すまでもなく、その社の事務に出てゐる二宮といふ人の惡戯です。この二宮といふ人は、當時四十がらみの粹な人で、やはり住之助の定連の一人です。僕等も常に寄席で會つて、挨拶やら言葉をはす間になつてゐた人です。その晩住の助を聴きに出かけると、その二宮さんがゐて、樂屋と僕等の一團の處とへ「彌助」の大皿をおつかひ物に寄越して、會うと「アッハッハッ」と笑うのでした。兩方とも新聞の事は何にも言はないで……。

記者より

淨曲そぞろ言は愈々佳境に入りました、讀者諸君の喝采さこそと思ひます。



淨瑠璃くちづさみ (二)

響 阿 彌

淨瑠璃藝術と人形藝術

淨瑠璃藝術は人形と同一體と見るべきか、人形と格別と判すべきか、語を換へて云へば人形の視覺と太夫の聴覺と合せざれば淨瑠璃藝術は完備ならざるものか、太夫の藝術進歩せば聴覺のみの藝術として獨立して差支なく進むべきものなるやと云ふ事、淨瑠璃道に修行するものは大に考慮すべきことと思ふなり。

淨瑠璃なるものは人形と合體せざれば完備せずと云ふか、左すれば太夫は何處までも人形と合體して人形を活殺自在に使はしむる者、即ち聴衆に視聽の快感を與へて始めて妙手上手と云ふべき也。反して太夫の藝術は人形とは別體の藝術也、太夫にして院本

人物の靈識を發現して人形の視覺を借らず、聴覺のみに訴へて聴衆に満足と與ふる事を得るものとせんか、人形と離れて獨立して差支なき藝術と稱すべきなり。

或る人曰く、人形と合して上手ならざる太夫は素淨瑠璃にて必ず下手なりと、吾輩明治以來の太夫を聴問するに必ずしも然らずと思はるゝあり、人形芝居に聞て餘り感服せざる太夫も素にて聞く時は頗る面白く聞く人もあり、又素にて聞て夫程に思ふ事能はざる太夫も人形と合して始めて其人の力を認むる事もあり、近時文樂座演舞場の興行を聞いても、津太夫の如きは人形と合して始めて當時の紋下に恥ぢざるかと思へ共、素にて聞けば土佐小鞆の方却つて腹も

あり情もあるかと思はるなり。吾輩の愚考にては少しく不遠慮の言草なれども、人形の視覚を借る太夫は無學にてもよろしく、素淨瑠璃の太夫は相當の教育必要なりと思ふなり、何となれば人形に合して語る時は餘り自己の分別腹を語り過す時は却て人形を活す事粗なり、人形は肉なり、太夫は靈魂なり、人形の肉を活動するは太夫の餘り分別過るは面白からざる結果を生ずるかと思はるゝなり、之に反して素語りは聽覺のみに訴へて世界の人物を活殺するものなれば、院本の作意人物の品位等諦め視覚を放れて人物を浮動せしめざるべからず、思ふに之は人形と云視覚あるに餘りに講釋をつけ過ぎる結果と思はるゝなり、例ば人形淨瑠璃は着色の繪畫なり、素淨瑠璃は水墨の畫なり、現代の時世は水墨を慾するか着色を望むか、是又一つの問題として、將來斯藝の改良を計るか復古を慾するかと云事の分るゝ處也、如斯の見解より淨瑠璃は人形淨瑠璃より一步進歩したるものなりや、又斯藝は以前の如く矢張り人形と合せざれば完備せざる藝術なるやと云ふ事は少しく斯藝の歴史に溯りて考證して見たく思ふなり。

はるゝ筋あり、於此太夫も修行に修練を積み、人形を放れて人物背影を聽覺のみに訴へて人形以上に活躍せしむるの術を現はすに至れり、此は其時代の太夫の語り口等に於て大に證明する處あるやと思はるゝなり。

如斯く太夫の素語り發達したるは即ち現今の如く且那藝素人藝の流行の元因を生じたるなり、若し斯藝が人形と合體せざれば能はざるものなれば現今の如く素人の流行は六ヶ敷事也、畢竟聽覺のみの藝にて少しく三味線に乗りて情愛を語り得れば、聽者に感涙を催さしむる事を得ると得心すればこそ多くの時間をも費して修行をもするものなり、若しも人形の視覚を借らざれば能はざる藝なりと思はばとても現今の如く流行は覺束なきかと思はるゝなり。

如上の觀察よりすれば、人形なるものは到底現代に於ては歡迎の餘地なきものなるやと云に、是も大に考慮すべき事と思ふなり、人形は幼稚の藝なり、一の木偶を使ふに三人もかりて活動を計る現代の活動と比較して馬鹿ケたる藝なり、自動車と駕籠とを見るが如し、然しながら文明人は却つて反對を欲

淨瑠璃の創業は素語りより始まりたるは勿論なり然るに延寶頃より井上播磨宇治か太夫の如き名人出て人形を使用して視聽合體の藝術と爲さん事を試みたるより、大に流行し竹本義太夫に至り流派を統一して淨瑠璃藝術を一定し一大興行物と爲すに至りぬ此の時に當り西鶴近松の如き文傑輩出して院本を書落したるを見るに大概は人形の活躍舞臺の背影に力を盡したる觀あり、其後竹田出雲出るや尙一層の改良を加へ、聽覺より視覺に重きを置き、聽衆と云ふより觀客と云見にて着色の甚だしき此時より甚だしきはなきが如し、これ出雲が興行に利を見るの卓見果して天下を風靡するに至れり、是れ徳川氏の世期天下着色を好む、此時より甚だしきはなきの時世必然の結果にして、出雲の目的の達したるなり、下つて文化文政の世、漢學隆盛仁義忠孝の道を説く者多く武士道を尙び商家は風流高尚を慾し世は着色を好むより總て高尚なる風韻を歡迎するに至れり、此の時代に至りて淨瑠璃藝術も人形を放して素語りにて事足るの感を與へ、教育あるものは却つて人形を放して太夫の腹藝を慾望するに至れるものならんかと思

するものなり、化學的の藝は日常目前に見飽きたるなり、科學者の野蠻を見る事を欲し文明人の幼稚の藝を視んと望むは誠に不思議のものなり、人形の歴史は無學の者の爲に發達したるものなり、現代の人形藝術は有識者が却つて古典藝術などと稱して歡迎するものあり、幼稚は却つて文明を壓する力あるものと云事も大に攻究すべき事と思はるゝなり。併しながら是は只古藝術として保存すべきものにて、將來大に發達を計りて興行として利を見る事は如何と思はるゝなり、是等の見より淨瑠璃は將來素語りにて發達すべきものなるや、矢張り人形芝居として發達を計らざるを得ざるや、人形芝居の藝とすれば淨瑠璃は大に復古を計るべき藝なり、何となれば現今の淨瑠璃は甚だ亂れたる藝と云はざるを得ず、又人形を放れて素語りにて進歩を策せんか、院本の改策人形を放れたる節曲等充分改良の餘地存するものあらんと思はる、又近來淨瑠璃の審査なるもの流行す審査員の掟則は何れの法に則りて甲乙を附するや、人形の間拍子にハズれたるは淨瑠璃の格に非ずと爲すや、此邊の事聊か理屈を述べたく思ふ事あり。



私の家と義太夫と

三浦 樂太郎

私の家と義太夫は却々深い仲であります。何故ならば、私の家は芝三田で可成り舊家でもあり、相當資産もあつたのを此義太夫の爲に棒に振つてしまつたのであるからです。

抑々私の家へ義太夫熱が吹き込まれたのは、明治二十七八年頃であつたと思ひます。其の頃私は未だ七八つでしたが、芝金杉にゐた野澤語いのと云ふお婆さんの師匠が家へ出入しはじめ、姉と母とが稽古を仕てゐたやうです。私は未だにその語いの師匠の顔や形を記憶してゐますが、縮れた髪の毛を小さな丸髷に結つて、四角張つた色の黒い人でしたが、何となく眼なごしに優しさのある人でした。其頃既に腰が曲つてゐましたからもう亡くなつてゐるにちが

ひありません。

その次に家へ出入を初めた師匠は野澤語勝と云つて芝田村町に居た師匠です。御亭主さんは吉田寛次と云ふ人形遣ひで、よく師匠の家の二階へ上つて大きな葛籠の中にはいつてゐる種々の人形を見せて貰つたものです。語勝さん夫婦は子供がなくて一疋の赤犬を飼つてゐましたが、此の犬は人間のやうに菓子や香の物などを食べ、おまけに一人で二階へ上つたり降りたりする事が出来ました。

斯うして姉や母が稽古してゐるのみならず、それでも足らずに其頃流行の娘義太夫で、小政だとか小土佐、素行（古い話ですから名前や時代に誤りがあるかも知れませんが）其歴のかがゝると琴平とか春日

とか區内の寄席は勿論京橋の鶴仙邊りまで聞きに行つたものです。春日亭は土地だけに定連であり、小

清は特に好きでして、此の人の爲には京橋はおろか淺草の東橋亭邊りまで聞きに行つたものです。而も姉と母だけではなく、祖父と父までが好きなのですから、四人連れで家は奉公人任せ、身代限りは當然すぎる位のものです。

のみならず遂には小清を聴いただけでは慊らずして、姉を小清の弟子にしたものです。何でも新橋のさる待合の主婦を頼んで弟子入りに連れて行つた處小清は「高座へ上げて商賣人にするなら弟子にするが慰みでは教へない」と云つたさうです。それで「それでは席へ出す」と云ふ約束の下に弟子入りしたと云ふ話でした。其頃小清は銀座四丁目の木村屋の近所に居たさうです。「何しろ友禪縮緬の蒲團を二枚も重ねて敷いてゐて全然御大名のやうだ」などと云ふのをよく聞いて子供ながら女義太夫などと云ふ者はたいしたものだと驚いたものでした。まあ斯うして何の位行きましたらうか、兎も角姉は小清の節を巧みに歌ふやうになつたらしいのです。けれどもと

う／＼席へは一回も出さず、素人で通してしまつたのです。無論小清の門から去つたやうでした。

さあ斯うなると當人より両親は大天狗です。父は諸官省用達でしたが、何しろ三田通り目抜き場所でしたから、全然店をせずしもたやで置くのも勿體ないと云ふので、下駄を商つてゐたのですが、ばんこに商賣を休んでは店へ床を拵らへておさらひをしたものです。當夜は近所合壁は勿論、遠くの親類までも狩り集めて聴き手とし、出入の職人などは嫌でも二段聴かされたものです。物の安い頃でしたが御馳走は菓子煎餅は無論のこと、壽司だ酒だと云ふのですから中にはこれを目當ての定連も大分あつたやうです。従つて私なども何時か「それや聞へませぬ傳兵衛さん」や「今頃は半七さん」は先づ第一にして大方のサワリは覺えてしまひました。今でも二つや三つは完全に語り得る自信をもつてゐます。

斯うして私の家の両親の義太夫熱は益々白熱化して行つて遂には姉には肩衣を拵らへてやつたり、見臺を拵らへてやつたりしました。本も版本では素人臭いとあつて、上手な書き手に頼んで書き本にした

りして天狗仲間をアツと云はせたものです。此肩衣見臺は後に母の幼な友達の娘で慥か竹本重吉と云つたと思ひました、麻布飯倉の道具屋の娘が商賣人になる時やつてしまつたやうです。斯うして一家の者が段々と義太夫の方が上達して行くと共に家連の方は次第／＼に傾いて行つたのは是非もないことです。

それから段々に芝三田通りに天狗の数が殖えて行きました。私共と同じ町内の刷毛屋、萬屋と云ふ輕節屋、三田二丁目のおかめと云ふ鬘屋、まだ澤山ありましたが思ひ出せません、此三軒の中萬屋は夫婦共亡くなつて今は代が變つてゐますが刷毛屋かもじ屋は今も残つてゐます。斯うした關係から三田へは續々と義太夫語りが入り込んで來ました。曰く寛糸、井筒太夫、まだありましたが忘れました。今も現に同所にゐる仲太郎と云ふ人なぞも土地の古い蕎麥屋の息子です。三田で玄人になつたのは此人一人でせうが、是でも如何に三田が義太夫の盛んの處であつたか想像されるでせう。

それから三田の義太夫を談るのに三丁目の百足屋



通話

當昭和三年八月二十七、八、九日の三日間午後二時から明治座で開演、一番目「敵討天下茶屋聚」、中幕上「青山播磨」同じく下「攝洲合邦辻」、二番目江戸育お祭佐七と四つとも揃へも揃つて殺害芝居、そんなことは何うでもよいとして、同劇は皆素人放れがして、而かも鈍帳臭くなく、偶々半熟があつてもそれがまだ玉子と來て居るところが納得される、特に田村西男なんといふ古強者は明治年代、中州の眞砂座あたりで狭衣や故膺阿彌など、同座して敏腕？を振つた以來の余が最負の一人、或る時は何の芝居だつたか忘れたが、俳諧師の役になつて、「趣味がな」とか何とか、當時吾々俳人間で口癖にして居るところをソツクリ舞臺でやるので、無暗に嬉しく爲

吳服店を忘れることは出來まん。私共なども此處の今はお婆さんですが當時の細君から吹き込まれたものなのです。同家は今も家業繁昌して同じ處にありますが、私共は筋向ひになつてゐたのです。そして語いの師匠は同家の親戚關係であつたやうです。この頃知つたのですが俳諧雜誌派の大場白水郎君も矢張り親戚ださうです。この百足屋の老主婦こそ三田の義太夫の最古參で若し義太夫界から義太夫の流行を助けた功勞者を表彰すると云ふやうな事があるならば、是非其の中の一人に加へねばならぬ人であることを披露して置きます。

何しろ七八つの少年の頃の事を四十面下げた今日アタマの底から引きすり出して書いたのですから成つてゐない事は御承知願ひたいと思ひます。これから義太夫に關する私の貧弱なる智識は全部本誌にさらけ出してお目にかけることに致しますが今回は此の位にして筆を擱くことに致します。



會劇

中野三九

に異例の喝采を送つた記憶が蘇る。

初汐や中洲の芝居夜を景氣 三 允

などいふ句も其當時の吟であるのだ。三宅孤軒、田中煙亭(元と塵外と號す)等は、俳句の上で、これ又た明治時代からの舊馴染、其他の名優一々は斷らぬが、種々なる機會で承知して居る。

二十八日天下茶屋三幕目「天神森返り討の場」から見た、五人の持役皆よし、煙亭が伊織の顔の作り、面長なので鬘との調和がとれ、それに聲が如何にも若々としてゐた、扱て筋書について一言するが、伊織がゐざり寄つて西男の三郎右衛門のうつかりしてゐるところを右の小手に恨の一太刀を浴びせる、それが淺手であるとはいへ、花道の引込みに疵を押へ

てギツクリと極まる丈では物足りない、その一太刀を功果づけるに大詰本懐の場で三郎右衛門のセリフとして、疵は癒つたが、時々痛みを起す、今も生憎く痛いので十分に刀が揮へない、併し何程のことやあらん、三人共に返り討ちにしてやるといふ意味のことをいはいせたい、又た南花の掃部之助も、ただ元右衛門を討取つたと告げるのみでなく、元右衛門の首を此場へ携へると、三郎右衛門の勇氣をくちくと共に源次郎、染の井、葉末をして愈々力強く感ぜしめる、そして槍なんかつけることを止めて、いざといふ時には助太刀するぞと槍を構へてゐる丈の方が内容が充實すると思ふ、「青山播磨」に於ける孤軒の播磨、きみ子の腰元おきくが左圍次と松蔭の意氣ツツクリとは誰もいふところで、改めてこゝに書くのが氣のさす位よくも手に入れたものだ、尙此脚本は申分のない出来だ、ただ筋を運ぶ方から考へて無理もないのか知らぬが、山王下の衝突の場で、南花の後室眞弓が仲裁した後、駕に入つてから、播磨が未だ獨身故喧嘩なごするのだから、嫁を貰へといふのはよく／＼の舊劇式で面白くない。そんなことは一

言もしなくとも、後にお菊のセリフで十分納得は行く、若し何とかがいはなくてはなら、あつさりといふ「獨身だから」といふ丈けに止めたい、「合邦」もよかつた、併し余は新橋演舞場で文藝の人形を見たばかりな爲めツイそれと較べたくなるので何うも……が實際鳳仙の合邦も、南花の玉手御前竹魚の俊徳丸も十分である、鳳仙について思ひ出すのは吉原引手茶屋西の宮のお樂、後に待合鳴子の女將の記事を國民に連載したことである、其後お樂も中氣で死に、鳴子の襖にかいた鳳仙の鳴子の畫も假りに震災まであつたとしても、必ず焼けてしまつたであらうが、今は頭を丸めての合邦役が若い時は隅に置けなかつたものと、芝居と事實をチャンボンに余一人に丈けは受取られてならなかつた、呵々、次は舞臺裝置について一言するが、蓮の花の眞盛りなのは役々の重ね着して居るのと對照してドンなものだらう、赤い花青い葉で舞臺を引立てやうとするのか知らぬが寧ろ之れは枯蓮にした方がよいと思ふ、その方が枯淡の趣を加へて合邦の住ひらしくなる、西男、孤軒煙亭等は俳句の方から、モット季節感念に注意して

却て本職の役者をして學ぶところあらしむるがよいすれはそこに素劇としての通話會の長所が發揮されるのだ、「お祭佐七」は素劇には持つてこいの狂言だ賑やかに大勢を舞臺に出して邪魔にもならず、清元連中は靈巖島の藝者と來てゐる、猿冠者、藤亭其地の役々にも一々敬意を表さねばならぬのだが、お世辭でなく皆よくしてゐるのだから、それで諒承して貰ひたい、二階に飾られた贈り物の内澤田として通話會諸先生へとある澤正の花輪が眼を惹く、澤正も舞台以外に何かと心遣ひが大變なものだ、休憩中中島操中將（陸軍）と逢つた中將は余の基敵である、佐賀縣の出身なので、萬朝の記者で鳴らした、同じく佐賀縣の出身故國城寺清君の子が葛谷きよみで、従弟關係にある叔父さんが田中煙亭だ、きよみ後援の催が昨日あつたのだが、昨日は都合が悪かつたので今日來たのだとのこと……戻る時下駄を取り代へられてしまつた。

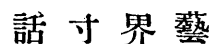
前號義太神樂正誤

△淨求菩提ノ「淨」ハ「上」ノ誤植

■芳河士附記——通話會では三階の切符は賣らなかつたといふことだが、そこが通話會だと言ひばそれまでだが、三階のから空きは見た眼に景氣が悪くていけない、次回には何とか考慮の必要があると思ふつまり、一階二階の切符を引受けた人に三階の切符を、ある限りの數文けつけてやるとか、青年團とか若くは他の可然團體を招待するとか、そんな風にするの悪くはないと思ふ。

鹽谷鵜平氏より

太棹拜見、わたしにはふしぎの世界を見せてもらふのです、謝します。ながふりのなかにへこたれて居ります。（七月廿三日）
土用の入り湯釜たぎらしても晴れず



十次郎威張つて曰く、金龍館がなせ繁昌するか知つてますか、樂

松助が病氣になつた時、源之助へ昔なじみがおひく引籠るのでさびしいでせうといへば、源之助大聲で、どういたしまして、私と松助さんとは大分年がちがひます。嘘だと思つたら、本郷座のピラを御覧なさい、四谷怪談に若手大一座と書いてあります。

觀音劇場の宮村松江が資産家の娘、藤田さん子、千代子姉妹も其通り、金龍館では花枝が相當に貯め

歌扇と夫婦になるとまできまつたらしかつた小治郎その後すつかり離れくで何の沙汰もなし、一體どうなつたといへば、小治郎曰く、あれは旅先の話さ、江戸表は赤の他人さ。

明治座の八月興行は例のノビレ少將で大人氣、御難なのは俳優連この暑いのに毛皮に包まつてハーハー「みんな知るめえが北極とは暑いところで御座んす」

太
棹
俳
壇
秋
雜
題
芳
河
士
選

夕陽や蜻蛉頻りに窓を打つ
生垣に豆の残花や赤とんぼ
提灯の落て流るゝ花火かな
黒玉の心元なき花火かな
紛れなき秋を見せたり桐一葉
濱け木上る朝冷えや栗落つる音
媒人のそつと指さす踊かな
石門に嘶く馬や秋の風
自炊子の月に小鍋を洗ひけり
後先に小村をはさむ花野かな
入船の山なす炭や暮の秋
雁鳴くやちらくもるゝ小窓の灯
七夕や机に餘る暮の空
虫賣りの歸る夜道や人絶えぬ
野の末や只遠白く秋の水

竹若嵐芳半梅三紅一海靜同啞同梅
林美松川壺鶯龍楓水叢月聲雨

案山子低く河面さびれし入日かな
 雁一羽曉の空急ぎけり
 狐追ふて濡れ来る犬や朝の露
 立札を梢に見行く紅葉かな
 行秋の疎林に來鳴く小鳥かな
 鳴らすなる鬼灯の穴太りけり
 渡し場や小店に並ぶ笹の柿
 蕎麥刈れば小さき菊の淋しさよ
 一群は竹へ戻るや稻雀

人
 洲の芦に集ふ小鳥や秋晴るゝ
 地
 徑盡きて河鹿は遠き流れかな
 天
 大燭も運ばれて萩に餘興見る

紅若
 白石
 甘露
 濃泉
 梧桐
 秋風
 流星
 潮雨
 蓬月
 薰風
 漁村
 花蝶

各地會報 八月

東京之部

東都聲義會競演會

第四回

東都聲義會の第四回競演會は八月二十四日より五日間入谷俱樂部に於て催ふされた。

二十四日 玉三(三鳳、三福)八陣(祖樂、三福) 日吉(和風、三福) 宗五郎(清遊、三福) 沼津(冠司、三福)

二十五日 錢別(素鶴、吉福) 赤垣(榮、道之助) すしや(吾樂、語作) 忠六(靜、吉福) 鳴戸(立昇、語作)

二十六日 儀作(團昇、猿三郎) 日吉(里芳、勝助) 壺坂(阿松、三福) 御殿(勘彌、三福) 新口(琴歌、三福) 酒屋(雲雀ひばり)

二十七日 安達三(銀水) 寺小屋(叶、新次郎) 十種香(喜代子、三福) 妙心寺(初音、新次郎) 壺坂(東花、紋之助) 二十八日 太十(喜川、伊達子) 八陣(横倉、伊達子) 管四(吾聲、庄次郎) 妻八(吾鈴、庄次郎) 中將姫(越見、庄次郎) 木下(要、伊達子) 因に同會にては今春三月二十

七、八の兩日、日本橋日鮮會館に於て第一回春期大會が催ふされたが、来る二十六、七の兩日雷門並木俱樂部に於て竹本さの太夫審査の下に第二回秋期大會を開催することになった。目下入會者勸誘中であるが、詳細は本所區相生町五ノ二九事務所高野昇氏方へ問合されたし。

豊澤會 第五回

松太郎門下を以て組織する同會は三十日淺草清島俱樂部にて其第五回を催ふした。

地方之部

札幌より

當地引語會は九月二日札幌南

二條羽磨氏宅にて開催。
太十(豊澤録) 白石七(豊澤巴) 忠六(豊澤若とめ) 酒屋(竹本都歌佐) 鳴戸(豊澤庄七) 釜入(竹本巴津玉) 白木屋(豊澤松若)

阿波通信

(橋本松帆堂)

八月十五日より五日間、撫養町新町安立寺庭前に於て各地方の素義連大會あり、昨年八月納涼會として第一回を催せり。

初日 忠六(瀬戸便風) 長局(古林丸ホ) お俊(川端龍玉) 壺坂(山田美福) 白木屋(吉田喜樂齋) 二日目 宿屋(文本舟月) 日吉丸(海出粹島) 伊賀八

(田中花月) 沼津(野々宮登昇) 布四(金山金花) 三日目 白石(竹本君子) 太十(泊正宗) 國性爺(黒田某) 阿漕(四宮鳴洋) 忠三(太田誠笑) 谷三(板東春花) 合邦(平瀬義若) 四日目 太十(藤原攝湯) 管四(山田梅園) 講釋(八木松鶴) 阿漕(齋藤白噪) 酒屋(長岡喜玉) 五日目 忠六(熊澤扇花) 管四(瀬戸便風) 阿漕(熊澤祥晃) 赤垣(森初音) 沼津(里崎靜壽) 港町(栗島吳旭) 三味線 竹本龍越、花澤咲春、豊澤徳八、豊澤呂賀久。

▲ 別報 今回江戸文學研究及び淨曲熱心なる大阪の木谷蓬吟及び石割松太郎、福原竹亭(徳島縣人) 諸氏が義太夫二代目即ち政太夫の墳墓が大阪安住寺にある記録等に關係あることを發見し、九月八日を期し政太夫百八十五年記念の講演會を開催する由、右に關する問合せ方、大阪府下箕西牧面村新市街福原虎雄氏宛に申越さる可し。

▲ 先便に申送れる當地の神童に附て小生實地に調査致せしに、本人は至て靜な質にて普通小兒と異なり、一人字斗り讀書して畫の方は眼にかけず、他の玩物も弄ばず、新聞の拾ひ讀する事大人も驚かす程なり、二年一ヶ月の兒と眞に不思議に有之、中村敬字先生の五歳にして漢字

素願せし如き有様なり、親は勞働者故我子の教育の仕方に餘程注意の要あり、何か宜敷方法を講じ度、東京の資格有方へ援助を求め此の兒將來出世の養育法を講じなば我神國の名譽かぞ信す、有識者の參考に通信す。

▼東京麻布學館主たりし岩田徳義は薩摩義士の木曾川工事に殉じたる新作淨瑠璃は如何なる事蹟か、又岩田先生は存命なるか、同氏は板垣が岐阜にて自由黨演説の際遭難の恩人なり、其後の氏、麻布學館を創立し社會奉仕の事業も種々講じられしと聞き及ぶ、右義士の淨曲は東京方面にて上場されしか、敢て識者に質す。

▼今回當撫養地へ大阪より歸來せる元別聲會の會員たりし藤村松女なる老婦が、文樂座人形に劣らざる人形を各地へ貸與する由、賃金は賃費にて役者も口過同様にて特約方依託を受け居り殊に東京方面へ一度視察旁持行きたき方針故、心當り方は當方(通信者)へ直接申込れ度、應分の盡力を採るべし。(松帆堂)

□素昇と美朝□

世が世なればマサカ二十錢の木戸で聴かせはすまいと、そぞろ涙にくれて割引券の大塚豊島亭にて素昇美朝を聴く。満員の夏の夜も不順の雨夜に案外涼しかりしは二十錢益々廉かりき、スケの素昇の伊勢音頭弾き語り不相變うまいもの、だが死んだ素雪がなつかしかつた、前にがや／＼出たお茶ツビ共ニサンザン汚れた耳を掃除した様の氣持で嬉しかつた、大半のお客は此素昇を聴く爲めのやうだが、夫も五十錢とは奮發しかねる連中とは情ない。

美朝の堀川猿廻し。前夜の三勝はいくらうまくともア、苦し

さうな顔をしたんでは氣になつてトモ聴いては居られなかつた、次晩は少しはいゝが矢張り胃散をなめたやうだ、何とかならぬものか、本人はコレ程骨を折てると見せる積りかは知らぬが悪い洒落だ、折角の美感をめちゃ／＼にした。鳥部山は少しアツサリであつた。紋の何とかはザマの悪い女だ、モウ少しスツキリした型でない又何倍も損で同情しにくい、ア、矢張り二十錢であつた、前語り共は一ト山物の密柑で數計り多くて尻が腐つてゐる、アレデ何處まで上達する氣か。(巢鴨町人)



正音苦聲

▼貴誌の名士義太夫觀を始め諸大家の健筆は實に一字千金、不勉強の玄人も貴誌に依て覺醒する事を信じます。(松虫生)

▼娘義太夫を獎勵鞭撻して下さい、あながち男の方ばかりの義太夫ではありませんでしやう、家庭へ入るには女が一番穩やかではありませんかしら。(まさ女)

▼記者は野暮天で生憎娘義太夫に知己が少くて困つて居ます秋口になつたら夜長に東橋亭あたりからボツ／＼初めませう、家庭へ入るに穩か？否？是に少し疑問です、あべこべになつては大變ですから。(記者)

▼松太郎さんの寫眞を見て驚いたのは童顔に

投書歡迎

- 一 單に義太夫のみでなく、演藝に關したこゝなら何でも結構です但人身攻撃は沒書
- 一 用紙隨意、切毎月十五日

て意氣旺盛の點だ、まさか若返り方を實行してる譯でもなからうが名人に年なしとはうまく謂つたものだ。(半可通)

▼津賀さんは全くうまいね、當代第一流だ、東京では名人だ、だが門弟にろくのものがない、小津賀など永い稽古も少しも上達しない、丸い顔に白粉ばかり塗つて居ないでミツチリ稽古しなよ。(長顔子)

▼三越ホールで開催の貴社義太夫競技會に僕も出演して大に鼻を延ばしたいものだが規則でもあるなら此欄で確答を願ふ。(清遊)

▼本社主催の義太夫會には規定を言つては別ありませんが、貴君が吾々の聴覺を感動せ

しめらるゝ盡力があるなら何時にても御申出下さい、要するに研究さういふ事が目的でありますから席次を争ふやうな事はお断りします。(係)

▼貴誌には藝評はあまり載つて居ませんが、寄席や貸席の玄人素人の藝評を澤山載せて頂く譯には参りませんか。(他山の石)

▼それがどうも尊重すべき本誌の紙頁を費すやうな語りに出會ひません、そんな好い語り手があつたら知らせて下さい、どうも五一三六團栗の背競べで評をされたら皆様がお腹立てせう、絃ばかり貰めてゐるのは御氣に召しますまいナ。(記者)

▼三越ホールの義太夫會に女義も語らせないは不公平だぞ。(越見)

▼オ、怖い、兄さん勘忍しておくんははれ、藝はマツクテも別腹でしたら御一緒に御來社下さい。(記者)

投書多く本掲載せきれず又人身攻撃的のもの數通は投没にしました。

寄贈雜誌

▼文藝	東京文藝社
▼淨瑠璃世界	京都其社
▼露	西宮其社
▼藝界新聞	東京其社
▼淨瑠璃雜誌	大阪其社
▼土	岐阜ウヘイ社
▼義太夫界	東京其社

募集

- ▼短評 毎月各貸席（玄素に關らず）義太夫會短評。
（匿名にてもよし）
▼正音苦聲 人身攻撃はいけませ
ん其他何でも結構。
▼俳句 題（秋雜）一人十句以内
其他各地會報。地方巡業記事等
（用紙隨意） 切毎月十五日）

編輯後記

本年八月は何十年來の不順氣候で、太陽の黒點とあつては喧嘩にもならない、人間業なら擲り殺されるだらう。

本號に松太郎氏の「松のみどり」を休載したのは残念でしたが、次號からは連載致しますから愛讀者諸君の御寛恕を願ふ。その代り斯界研究の第一人者たる三宅周太郎氏の才能者の發見と題する十餘枚の原稿を載せたのは聊か本社誇りとする所であります。

夏季は避暑旅行が多くて思ふやうに原稿が集りません、小村孤村氏の小説「かげ口」も切後に到着しましたので本號に掲載する事が出来ませんでした、右同氏及讀者にお詫びします。

三宅孤軒氏は御承知の通り通話會劇で大役數役を引受けられたので本號には執筆の余暇がなかつたのも遺憾でした。次號には義太夫系統と稱する斯界唯一の珍幅を寫真版として掲載します。

本社趣旨よりすれば、専門文士諸氏と同時に玄素兩界の人々より高見又は有益な投書を願ひたいものです、御遠慮なくドシ／＼御發表下さい。

女義の方へも追々擴張しやうと企てゐるが、どうも此方面は皆隠れたる後援者が嚴然と控えて居るので、うっかり口を出せない、何とか好い方法はないものか、斯界識者の智恵を借りたいものです。編輯上營業上不備の點少なからずと思ふ、御指示を仰ぎます。

——芳河士生——

太棹社 義太夫會 第三回

會場 三越ホール
時 日 九月十八日午後〇時半

本社主催の義太夫會は益々聴衆の好評を博し、且つ其目的たる義太夫藝術の研究方法として、優逸なる結果を呈しつつあり。今回は下記の演者と演題を推獎して諸君の嚴評を待たんとす。

從來の一弊風たりし席次に一大革命を企てん爲めに、特に優劣を以て席次を決する事を廢し、演者及び演題の都合を以て席次を定むる事とせり。諸君乞ふ、今後興業的に非ざる限り、眞に藝術を愛し研究するの慨念ならば、從て席次を爭ふを唾棄し、小感情に藝術研究の本義を忘るることなきを希望す。

□入場券は本社へ御申越次第贈呈（ホール六階の入口にても呈す）

番組

柳	矢富 靱
田植	豊澤 團八
大安寺	高野 昇
河庄	鶴澤庄次郎
廿四孝	谷口響阿彌
	鶴澤 燕三
	杉山巴仙
	竹本 米翁
	三井 篁鳳
	豊澤 猿之助
	ツレ 豊澤 猿三郎
	琴 豊澤 宗之助

以上

■時間は定刻に開演

御註文の洋服は

神田區金澤町四番地

高級裁縫 親切丁寧 工藤洋服店

『太棹』愛讀諸彦に限り一割引。御一報次第參上可仕候

野中痔座藥

定價一瓶

金五拾錢

▽イボ痔、肛門靡爛、脱肛痔、烈痔、痒痔、痔出血
痔瘻の藥によし。

東京市小石川區關口町六五

發賣元

中野藥學實驗所

電話牛込一七二三番
振替東京三六五一六番

行發日一回一月毎 號 月 九

定價		廣告料	
一	部	特	別
金參拾錢	郵税二錢	一	頁
金壹圓七十錢	郵税共	一	頁
金參圓	郵税共	一	頁
金貳拾圓	郵税共	一	頁
金貳拾圓	郵税共	一	頁

▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割増、但し一錢切手の事

昭和三年九月十二日印刷納本
昭和三年九月十五日發行

東京市小石川區表町一〇九

編輯兼 發行入 富 取 壽 鹿

印刷人 田 邊 重 光

東京市牛込區東横町七

印刷所 一誠堂印刷所

電話牛込五一九一

東京市小石川區表町一〇九

發行所 太 棹 社

振替東京三一七八五番



辨松總本店 玉井仙太郎

東京市京橋區采女町貳拾八番地

歌舞伎座前

電話銀座

二四〇九番
四七二番
九六四番

自宅 京橋區築地二丁目五番地

電話京橋二五六番

□經費節約は復興の第一歩なり。



秋の大賣出

◆ 列陳へ揃取に富豐種各をどな品用實や品行流の秋今 ◆

澄み切つた大空に清涼の氣漲る頃となりました。三越では年中行事のうちで毎年多大の御好評を戴いて居ります「秋の大賣出し」を十月一日より

開催いたします。本年は特に流行品や實用品を各種潤澤に取揃へて廉價に提供致します秋のお買物は何卒三越へ御命令の程偏に御願ひ申上げます

お手紙にて御注文の節には「三越通信販賣係」宛に御用命を願ひ上げます。御申越次第カタログを御送附致します

東京市



三越

日本橋